

日本近代演劇における演技術の歴史

著者	笹山 敬輔
内容記述	筑波大学博士（文学）学位論文・平成23年3月25日 授与（甲第5593号）
発行年	2011
URL	http://hdl.handle.net/2241/113051

氏 名 (本籍)	笹 ^{ささ} 山 ^{やま} 敬 ^{けい} 輔 ^{すけ} (富 山 県)
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 5593 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	日本近代演劇における演技術の歴史

主	査	筑波大学教授	博士 (文学)	浜 名 恵 美
副	査	筑波大学准教授		加 藤 百 合
副	査	筑波大学准教授	博士 (文学)	吉 原 ゆかり
副	査	明治大学教授		神 山 彰

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、1900 年から 1950 年までの日本近代演劇史を演技術の視点から再考察し、個々の演技術の具体的な形態とその変遷を明らかにすることである。演技術を多様な思想や文化状況が表象されるプロセスとしても捉え、当時の演出家や俳優たちが模索した演技術を同時代の知識との関連において検討しながら、既存の日本近代演劇史を書き直す。

本論文の構成は以下の通りである。

序章

第一章 九代目市川団十郎の「肚」と「顔」

第二章 洋行と演技術——抱月・松翁・左団次

第三章 「内面」の演技と新しい「型」

第四章 何が「心」を演じるか——小山内薫におけるスタニスラフスキーと心霊主義

第五章 専門的活動俳優の養成法——村田実と演技の法則

第六章 プロレタリア演劇の「電気人形」

第七章 千田是也『近代俳優術』

結章

序章は、演技術という概念の定義を行い、1900 - 1950 年代という時代区分（九代目市川団十郎の芸談が出版される時期から千田是也の『近代俳優術』の出版年）の意義、演技術を理解するためには当時の舞台技術や政治的コンテクストだけでなく、生理学、心理学等の「身体」や「心」に関する認識の枠組みを解明する必要があることについて論じている。

第一章は、九代目市川団十郎の芸談と同時代の団十郎に関する言説を分析している。団十郎は新しい演技術を構築したわけではなく、その演技は「型」の記憶と舞踊で得た形を持つ「身体」を前提としたが、他方で団十郎の「肚」を「内面」と捉える同時代人も現れ、明治後期以降、演技において「内面」が重視される

ようになる状況を解明している。

第二章は、1900年代に洋行した島村抱月・松居松翁・二代目市川左団次を中心として、彼らの日記や観劇録、帰国後に発表した文章などを分析している。日本人の「表情」の「貧弱さ」という問題に直面した彼らが、日本人の「日常」を「模写」することよりも、役の「内面」を可視化させることを優先し、そのために「豊かな」「表情」を持つ「身体」を構築することが必要となり、「表情」の研究を行ったことを明らかにしている。

第三章は、第二章で分析した洋行者を含めて、この時代に新しい演技を目指した演劇人が、新しい「型」の構築によって演技を実現させようとしたという仮説をたてている。新しい演技を追求した彼らは歌舞伎の「型」は否定していたが、西洋人の身振りの「型」や「内面」を表現する新しい「型」を追求していたことが検証されている。

第四章は、自由劇場以後から築地小劇場の頃までの小山内薫の演技術に関して、従来はスタニスラフスキーに関連して論じられてきたことを確認後、小山内が大本教信者であったという事実注目し、「靈魂」や「魂」と演技術という新しい議論を提起している。当時の「心」に関する多様な言説を分析し、小山内は「靈魂」に傾いていったが、演技術の源として「無意識」と「靈魂」のどちらもありえた状況であったことを明らかにしている。

第五章は、今後の演技術研究に必要な論点である、演劇史と映画史とに関係する村田実の『映画劇俳優術』（大正13-14年発表）を分析している。村田の演技術とは、生理学・解剖学によって得た知識により、「身体」に「正しい」「型」をセットしておき、撮影現場でそれを再現することにより、「感情」を呼び起こすことであった。彼の演技術は、同時代の知識を応用して構築されており、その応用がなされる経緯と時代背景について検討している。

第六章は、プロレタリア演劇を代表する俳優である丸山定夫の演技論を分析している。プロレタリア演劇では、演技を唯物論／唯心論の対立で捉え、「唯物論的演技」を主張した結果、丸山らの演技論では「心」や「感情」といった問題が扱われず、理想の演技とは「電気人形」のように「身体」を操縦することであったことを解明している。さらに、1930年代にこの演技術を疑問視した千田是也を取り上げ、彼と村山知義の論争について考察している。

第七章は、千田是也の『近代俳優術』を取り上げ、千田が大きな影響を受けたスタニスラフスキーの『俳優修業』と精密に比較し、彼のスタニスラフスキー受容について検討している。両者の演技術の相違点を解明し、その背景に両者の「心」の理解が異なるという事実があることを明らかにしている。さらに、千田の演技術の背景にフロイトの精神分析とパブロフの条件反射説が一体化した唯物論心理学があることを指摘している。

結章は、第一章から第七章までの成果をまとめ、さらに今後の課題について述べている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、1900年から1950年までの日本近代演劇史を演技術の視点から書き直すことに取り組んだ意欲的な論文である。本論文の著者は、日本現代演劇における演技論や演技術を理解するためには、日本近代演劇における演技術を体系的に記述する必要がある、さらに演技術は同時代の知識の枠組みに関連して解明されねばならないという立場に立っている。本論文の各章の考察は一貫してこの立場からなされ、またその分析もこの著者の立場を支持するものとなっており、全体としてまとまりのある論考となっている。

演技術は、理論的に構築されているとは限らず、俳優が経験的に行っていることも含むために、体系的記述が至難である。日本近代演劇史に関しては、多数の先行研究があるものの、演技術の視点からの体系的記述

述がないという事実が、この困難を物語ると同時に、本論文の独自性を立証する。本論文は、九代目市川団十郎の芸談が出版される時期から千田是也の『近代俳優術』の出版年までの50年間に、役の「内面」や「心」の表現をめぐる、多様な演技術が模索されていたことを、一次資料の丹念な調査により解明している。特に重要な指摘は、「型」という概念が、ある時期までは歌舞伎や新派に限定されず、「新劇」でも用いられたということである。小山内薫の「靈魂演技論」が当時の新興宗教との関連で考察されている点は特に独創的である。また、第一章の骨相学・観相学、第四章の心霊術、第五章の解剖学とジェームズ・ランゲ説、第六章の行動主義心理学、第七章の条件反射説とフロイト理論と、脱領域的な言説が演技術の構築に密接に関わったことが解明され、日本近代演劇史研究に新たな知見を寄与するものとなっている。各章の問題設定はいずれも先鋭であり、第四章を筆頭として、著者の卓越した創意と洞察力を示している。

以上のように、本論文は力作ではあるが、問題がないわけではない。日本近代演劇における演技術の歴史に関しては、近世と近代のつながり、女優の演技、観客反応、関西における興行など、本論文が十分取り上げることができなかった事項が残っている。

とはいえ、このような課題への取り組みは著者の今後の研鑽に託するところのものであり、日本近代演劇史を演技術の視点から新たに書き直した本論文が達成した成果は極めて優れたものであると判断される。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。